

# 楷書体の句

『太虚集』・長田不知論

大 島 富 朗

## 一

『太虚集』、昭和六十年十二月一日発行、私家版。長田不知（本名、壽夫）の処女句集にして、生涯唯一の句集。

同句集を編むに至った経緯を不知はその跋文で次ぎのように述べる。

生涯に自分の句集を作る意志はなかったが、「朝」の人達の熱心な勧誘を受けてその機縁に順うことにした

公的私的を問わず句集の刊行が流行する昨今、「俳句を自分の仕事として真剣に取り組む」という強い自覚を持ちながらも「生涯に自分の句集を作る意志はなかった」と記す不知の言葉は新鮮である。不知の面目躍如たる言葉であり、不知が不知たる所以である。そうした強く激しい意志を内に秘めつつも、「朝」の同人達の勧めに従順であり、決して頑冥固陋でなく、己が我をいとも簡単に翻すところもいかにも又不知らしい。そうした不知の人柄を熟知するゆえに、弟子達も熱心に勧めたと思

われる。

改めて『太虚集』の句と跋文に目を通す時、新進詩人としてその将来を期待された時を若き折りに持ちながら、職業詩人としての世間的名利とは無縁にして、生涯一國語教師として野にあり、特に師系を求めず「自分の作りたいように俳句を作る」姿勢を堅持した不知の、俳句への深い愛着を感じる。

『太虚集』、総句数三八九句、主宰誌「朝」第一集、第二二一集に発表した全五九七句の中から自選し、斧正を加えた、端正にして骨の太い、譬えていえば楷書体の句集である。

## 二

昭和六十一年「俳句」五月号、新刊俳書展望欄で黒田杏子は『太虚集』紹介にあたって、同句集から十三句を抄出し、

白露や鳥獣魚虫おのがじし

蝶々のむかしむかしのごとく舞ふ

冬晴れて飯食ふことのさみしさよ

合歡の花昼寝に死者がやってくる

稲妻や天の一隅ふと見えたり

遙かより帰り来りぬ昼寢覚

住み馴れて地に在る日々や天の川

の七句を一括して、

この透明な感じはどこから来るのだろうか。自由さと初々しさとさらに懐かしいような寂しさとはと評言。更に、不知の跋文を引用しながら言葉を継ぎ

この一卷に収められた俳句はどれも優しい表情をしている。手あかのつかないみずみずしさにあふれている。そのことは大変な魅力である

と、終始好意的な筆致を示して、四百字詰原稿用紙二枚半弱ほどの文章を結ぶ。

恐らく、黒田杏子と不知とは『太虚集』という一冊の句集を紹介しての、単なる評者と作者という無機的關係であって、個人的面識はなからう。この点に関しては、跋文の引用が多い黒田の文章からも判断できる。しかし、黒田の文章が斯くの如き新刊展望や紹介欄が往々にして見せる社交辞令的なその場限りの、毒にも薬にもならない通り一辺のそれでないことは、不知の高足の一人として四十年余の知遇を得て来た菊地正次の、以下の文章からも明らかである。

不知先生の句にみられる「やさしさ」は少年のような、無邪気なやさしさだと思います。(略) 不知俳句の大きな個性のひとつは、ふつうのことを、新鮮な驚きでとらえる目と感性だと思っています。

先の、黒田の指摘にあった「透明な感じ」「初々しさ」「みずみずしさ」は、菊地が述べる「少年のような、無邪気なやさしさ」を前提とすることで、より深く理解できる。黒田の、短いながらも真摯な『太虚集』紹介の一文が、見事に不知俳句の本質を見抜いた論になっていることに改めて驚かされる。と同時に、質の高さによって現代を代表する優れた感性の持ち主である著名な俳人の手で世に紹介された『太虚集』の僥倖を素直に喜ぶものである。

不知が主宰する隔月俳誌「朝」は、『太虚集』上梓を祝う意味で、昭和六十一年三月の一二四集をその記念号とし、「太虚集特集」を組んだ。同特集で、俳句川柳研究家佐藤要人は「太虚集を読む」と題する一文を寄稿し、不知俳句を「方丈の文学」と規定した上で「離俗の精神から生まれ」「そのまま風雅の道へつながるもの」があると指摘する。佐藤いうところの風雅とは「孤独な人生探求の道」の謂であると断りつつ、

不知俳句の特徴は(略)人間の抜き差しならぬ宿命を甘受しながら、ひたすら風雅の道を辿ろうとする一途の意志がにじみ出ている

と述べる。黒田が先の引用において「懐かしいような寂しさ」と婉曲に表現するものを、佐藤は別の視点から、もう少し踏み込み丁寧に評してみせたが、その差は不知を個人的に知るものと知らぬものとの差から生じたと解せば事足りよう。勿論、黒田のいう「懐かしいような寂しさ」とは単なる詠嘆的な叙情性ではない。佐藤の指摘にもあった「人間の抜き差しならぬ宿命を甘受」する姿勢に起因するものである。

尚、「鹿火屋」同人の北沢瑞史も、同じく一二四集に一文を寄せ、不知俳句に揺曳する「諦観」を指摘し、

文学を愛し、人生を愛し、あらゆるものを愛したとしても、結局最後はさびしさが残った。そして、それが人生であったという大前提が不知氏の中には常住していたように思われる。その諦観の大前提へ向けて、作品を歩ませてきたように思われてならない。

と、『太虚集』と不知俳句を読み解く。

「寂しさ」「宿命」「諦観」という具合に三者三様の理解を示すものの、不知俳句の根底を流れる本質を鋭く剔出しているのが興味深く思われ、そのいずれもが黒田抄出の句中に伺われることを注目したい。

### 三

『太虚集』の特徴のひとつは、その編年体形式にある。

朝寒やつまめば蠅の生きてゐし

という、昭和十九年三十一才の時の句を巻頭とし、昭和六十年七十二才、

詩稿若くわれの古りける秋夜かな

に至る四十二年間の編年体自選句集である。それを〈表一〉に見るように、二度の中断期（昭和二十二年～同三十九年・昭和四十三年～同四十四年）を除く、計十三の年立てからなる。考えるに、こうした目次立ては、己が人生をその折り折りの俳句によって跡付け、生涯を年譜的に俯瞰し記録として残そうとする

る確固たる意志の所産であろう。

二十七才で故郷の家を妹に頼んで上京、爾来七十五才の四月、病を得て帰郷を余儀なきものとするまでの約半世紀の長きを、他郷にて過し、妻子を持つことなく、あたかも求道者のように独居し続けた強靱な志が、人の「機縁に」触れ、それに「順うこと」を決意した時、その句集を唯一の生存証明たらしめんと

〈表一・季節による句数分類〉

計	昭和													年 季 節
	58 5 60	56 5 57	54 5 55	52 5 53	51	49 5 50	48	47	46	45	41 5 42 <sup>注6</sup>	40 21 <sup>注5</sup>	19	
11 (3%)	1	1	2		3				1	3				新
66 (17%)	6	5	6	8	3	11	2	2	4	6	13			春
113 (29%)	10	13	13	13	5	8	8	8	4	8	19	3	1	夏
96 (25%)	8	5	4	3	4	10	13	9	5	9	8	11	7	秋
99 (25%)	5	6	9	9	4	15	16	2	9	2	8		14	冬
4 (1%)			4											無
389 (100%)	30	30	38	33	19	44	39	21	23	28	48	14	22	計

〈表二・季題排列分類〉  
注 8

計	植物	動物	行事	生活	地理	天文	時候	排列 季
5				1		1	3	新年
27	9	5	3	3	2	2	3	春
67	24	13	2	7	3	11	7	夏
49	18	14	4		1	7	5	秋
50	10	2	4	6	3	9	16	冬
198	61	34	13	17	9	30	34	計

して編年体という形式を選んだと考えたい。

この点に関しては、「詩稿若くわれの古りける秋夜かな」以外にも、

向きて立つわれに枯れ木の神通ふ (S 19 ~ 21)

懐手しながらおのれ暮れゆけり (同右)

読初や臨済が喝先づわれに (S 46)

帽子被ればわれを物かと蜻蛉止まる (S 47)

一葉忌献花の列にわれも居り (S 52 ~ 53)

スケートに若きら溢れわれをちず (S 56 ~ 57)

〈傍点引用者、以下同〉

のような、一人称の句の多さが目立ち、二十八句を数える。他にも不知俳句の語彙として頻出するのは、

紫陽花のいのちのいろのみずあさぎ (S 41 ~ 42)

風邪に臥て二月のいのち淡きかな (S 46)

暮のいのち愛しく思ひ声かけぬ (S 47)

雪積んで小鳥のいのち細う見ゆ (S 54 ~ 55)

春草をいのち延べむと食うべけり (S 56 ~ 57)

炎天や建が魂が空翔る (S 58 ~ 59)

などの句中にある「いのち・魂」であり、十二句を数える。しかも、こうした「いのち」の認識は「淡き・愛しく・細う・延べむ」という、健康に満ち／＼た、あるいは福徳円満な生き方から生まれたそれではない。「虚弱」ゆえ「農家の跡を継げないと覚った」自己認識の所産である。この心理的傾向は不知をして夏・冬という、寒暖の差が激しい季節へ真向う姿勢を生む。

〈表一〉に見るように、夏一一三句・冬九十九句、計二二二句は過半数を超える。新しい生命の芽ばえ(春)、生命の充足・次世代へ生命の継続(秋)という「輝き・実り」への詠嘆的叙情とは無縁である。しかも、齢を重ねた揚句に行きついたものではない。戦争体験という風な通俗的な感傷主義の帰結でもない。土岐敦によれば、長田壽夫の「不知」なる俳号の使用は古く、昭和二十一年六月からのこと、「大愚」「太虚」「寿夫」と変遷した末に行きついた号で、以来その命終まで変えることがなかった。不知三十三才の折りである。

尚、「ホトトギス」雑誌、虚子選による不知俳句と俳号は次の通り、いずれも一句欄である(句上の×印は『太虚集』に入集せぬもの)。

秋の蝶暖簾へ吹かれ死ぬことも 大虚 (588号・52012)

熊蜂に菊凛々と澄みにけり 大虚 (589号・S21 1)

向きて立つ枯木に言葉あるごとし 大虚 (592号・S21 4)

×立ち去れる後ろ枯木の呼ぶごとく 不知 (597号・S21 9)

×時雨来やすなほち陰る部屋の菊 不知 (602号・S22 2)

枯枝にひっかかりつゝ冬日落つ 不知 (603号・S22 3)

マスクして言葉少なに身を守る 不如 (609号・S22 9)

昭和二十二年九月の「不如」は「不知」の誤植であらう。「ホトトギス」に依れば「不知」は二十一年九月が初出、土岐の「二十一年六月」との証言に時間的ズレが生じるが、投稿月日と掲載誌上の月日の違いと考えてよい。不知が「不知」なる俳号を己がものとしたのは矢張り土岐の説く所が正しい。

戸籍の名前に自己の反映はない。斯くあれかしという親の願望であるが、号の選択には確固たる意志が働く。「不知」が不知により俳号として選ばれた時、不知は「不知」として己が生き方を規定した。「わが」「いのち」の在りようと言ひ替えてもよい。「而立」には三年ほど遅れるが、その後「不惑」「知命」「耳順」「従心」を範とせるような、市井の隠者たらんとして不知は「不知」を受け入れたと解せよう。

勿論、「不知」という号の典拠は『論語』であらう。その冒頭「学而第一」中の章句「人不知而不愠、不亦君子乎」は余りにも有名である。又、同じ「学而第一」に「患不知人也」ともある。河口帰蔵の教示によれば、不知は「為政第二」の「知<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知。是知也。」を好んだという。であればなおのこと、不知の「いのち」の在りようが具体性を帯びる。

その在りようとは即ち「如何に」という命題と共存すること、「いのち」を凝視しつつ生きることであった。その意味で、

朝寒やつまめば蠅の生きてゐし

秋の蝶暖簾に吹かれ死ぬことも

おのがじし蔭もち生きて冬の蝶

などの初期 (S 19 ~ 21) の句で始まり、

詩稿若くわれの古りける秋夜かな

で巻を閉じる『太虚集』は、句集の性格を示すに暗示的である。「生きてゐし」「死ぬことも」「生きて」の等しく向かうものは「いのち」そのものである。しかも「(冬の) 蠅」「秋の蝶」「冬の蝶」というように、「いのち」の盛んな時のそれらではなく、季節はずれの生き物の「いのち」を見る。不知が「おのがじし」と詠む時、複数の「冬の蝶」にのみ「思うままに」とか「それぞれ」というような、対象への単なる呼びかけの発想で機能するのではなからう。自己へむけての意を含むものであることは異論なき点である。死んだかと思えばまだ生きている、死と隣り合せの生、それは一人不知のみに許された「いのち」を見るのではない。生きとし生きるものすべてに共通する「いのち」の貴さへの凝視である。命終の時まで生きねばならぬ「いのち」への共感であり、「いのち」へのやさしさでもある。そのことは、

蝶々のうれしといへるごとく舞ふ

蝸牛安らぎあるよ物の陰

無尽蔵に湧く穀象を祝福す

旅立つや先鷓鴣にパン撒いて

などの句からも知れよう。

「生きてゐし」に始まり「われの古りける」で終る『太虚集』にとつて、編年体こそが最もふさわしく、不知により紡ぎ出された、不知をも含む「いのち」の歴史にとつて必然の形式といえよう。

「而立」から「耳順」を経て「従心」まで、見事に「機縁に順」っている。

#### 四

一つぬひで後に負ぬ衣がへ

不知の好む芭蕉の句である。「極めて自然で心に沁みる芭蕉の俳句である」と、『太虚集』の跋文は述べる。

同句は『笈の小文』中の詠句、杜国（万菊丸）を伴つての心安立ての旅のためでもあろうか、氣負いがなく、洒脱な風趣が感じられる俳諧らしい佳句である。芭蕉を芭蕉たらしめた所謂『猿蓑』期の句ではなく、一寸前（貞享五年）の句を好むところが、いかにも不知らしいといつて言えなくもない。最も、素直に「自然で心に沁みる」と鑑賞し述べるまでに至るその道程は決して平坦なものではなかったと想像できる。

「君は将来必ず俳句を作るようになる」と飯田蛇笏に言われながらも、作家たらんと志し、「俳句を文学の中で下に見、俳人となる志がなかった」「俳句を弱小の文学とみる」青春時代から、再三再四に渡る主宰誌「朝」の創・休刊を繰り返すという曲折の中で到達した安堵が言わしめたものであろう。年譜的に言えばおそらく知命から耳順までの時期と考えられる。

向きて立つわれに枯木の神通ふ (S 19) 21  
の、厳しくも凜乎とした意志の激しさが生々しく表白された句が、

枯木見てあれば安心かへり来ぬ (S 46)

と、その所を得て、落ち着くまでの年月と軌を一にしよう。改めて佐藤の「宿命」、北沢の「諦観」という鋭い指摘が想起される。それは、不知の文学的遍歴が辿り着いたところであり、「作りたいように俳句を作る」「解り易い句を作る」と言わしめたものの正体でもあった。そして、それは等しく「いのち」の癡視の果てに獲得されるものでありえた。

不知にとつて己がいのちの癡視は常に旅中であつた、その意味でも芭蕉と通じ合うものがある。

芭蕉、二十九才出郷、五十一才客死。

不知、二十七才出郷、七十五才病を得て帰郷するまでの

約五十年を他郷にて過す。

一方、芭蕉句は若くして蟬吟と死別したためか、旅は、

雲とへだつ友かや雁のいきわかれ (蕉翁全伝)

野ざらしを心に風のしむ身哉 (甲子吟行)

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮 (同右)

旅人と我名よばれん初しぐれ (笈の小文)

行春や鳥啼魚の目は泪 (おくのほそ道)

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ (同右)

旅に病で夢は枯野をかけ廻る (笈日記)

などの句に顕著なごとく、一会の別れにして常に死や病を影として持ち、「日々旅にして旅を栖とす」る日常そのものである

が、不知にはそれほど突き詰めた悲愴感はない。

冬の雲ひとりで在ればいつも旅 (S 48)

に見られるとおり、いささか客観的に、それもやや楽しんでい  
るような余裕がある。意地悪い見方をすれば、どこか他人事の  
ような感じを否定しえない。旅とはいずれ終るものであり、あ  
らかじめ帰るべき所（故郷・我家等々）を想定したものと解す  
るのは穿ちに過ぎると思うが、気になる点である。言い換えれ  
ば、旅が日常か、非日常かという認識の問題である。

現し身の帰る所は「ひとりの家」<sup>註20</sup>であつても、その心の帰る  
所は常に故郷といつてよい。

不知には故郷を偲び懐しむ句が少なくない。<sup>註21</sup>

柵の花なつかしや屋敷隅 (S 46)

母の亡き憂ひ新たや冬木立 (S 47)

出家郷三十年

夢にみる花野のわれを悲します (同右)

三月十四日は母の忌なり

菜の花を机に供ふ母の忌ぞ (S 48)

着なじみて母裁ちくれし夏衣 (S 49)

故郷は開発されて田園既に亡ぶ

秋風に幻の村灯りけり (S 49～50)

青葉して忌日の父が近づき来 (S 51)

父母未だ在世しき

春暁のふるさと立ちて出でしきり (S 54～55)

幼時懐古

幟立てて甲斐の男の子と育てらる (同右)

幼時懐古

麦打てる父と母とを敬へり (S 56～57)

いずれも童画風な、懐しさに溢れる故郷の思いがある。先の黒  
田の評言にあった「透明な感じ」であり、少年の眼を通して視  
るような「初々しさ」と「懐かしさ」が溢れていて平明である。  
それは、不知にとって故郷は母そのものであった。母を追憶す  
る不知は「ひとり」で寂しさを実感するにしても、決して孤独  
ではない。「所思」の詞書きを持つ「此道や行人なしに秋の暮」  
と詠じた芭蕉は帰る所を持たぬ、一所不住ゆえに孤独であった。  
「猿を聞人捨子に秋の風いかに」（甲子吟行）と吟ずる非情さも  
畢竟孤独の所産といえよう。が、不知俳句はそうした非情さや  
孤独はない。

六十も半ば過ぎてなお「幟立てて甲斐の男の子と育てら」れ  
た故郷への思いを詠む不知が、その命終を亡き父母の懐たる甲  
斐の生家で迎えたという事実は、正しく、彼にとっての「旅」  
が、帰る寄辺を持つ旅であったことを物語っている。

意識するしないに拘らず、芭蕉の「一つぬひで」という句  
を「心に泌みる」ものと明確に言い切るのは、近世的言彙でい  
えば不知が業俳の人にあらずして、「俳句を自分の仕事として  
真剣に取り組」みながらも「所謂俳人と呼ぶ人達の俳句にうん  
ざりしている」<sup>註22</sup>不知が遊俳の人であった証拠でもあるうか。

『太虚集』中の旅の句を以下抜出してみる。

草の実をつけてひと日の旅終る (S 48)

冬の旅小さな家に鍵さして (S 49～50)

旅立つや留主の山茶花散るがまま (同右)

旅立つや先ず鶺鴒にパン撒いて (S 49 ~ 50)

句数そのものは決して多くはないが、「鍵さして」「留守の」「先ず：撒いて」という表現の裡には、帰るべき家有る安堵感が確実にあり、しかも、そこには山茶花や鶺鴒が主と共生している。共生者は〈表三〉が具体的に示すような、ある時には鶺鴒・蝸牛・蟻・蠅・蟻・穀象虫・邯鄲・金魚・蝶などの鳥獣魚虫、梅・椿・紫陽花・木槿・朝顔などの植物である。<sup>注23</sup>彼らと共生する限り、人肌の温もりなき寂しさはもとより覚悟の事であり如何とも為難いものの、孤独ではない。時には、

留守訪へる足跡は誰ぞ落椿 (S 52 ~ 53)

鶺鴒のゐるわが庭の紅梅図 (S 54 ~ 55)

夏日閑居

大揚羽時をり部屋の様子見に (同右)

夏たのし百虫部屋に見参す (S 56 ~ 57)

といった風に、独居者不知に対してやさしき「いのち」見舞に訪ずれるような思い遣りを示すのである。

## 五

桐咲いてそこがうすむらさきの空 (S 54 ~ 55)

大らかで巧むところがない。それでいて幽かに艶が匂う。

「発句は頭よりすら／＼と、いひ下し来るを上品とす」とは『去来抄』に見られる芭蕉の教えである。腰折れのない、文字通り「すら／＼と」した句である。初出型は下五が「薄紫の空」である。「うすむらさきの空」と直すことで漢字表記の固さがとれ、「むらさき」の「うす」さが生かされた。桐は樹高ある木

にして、単に見上げただけでは葉が差し障りその花を確と見定め難い。桐の木と不知との間の微妙な距離感が句中にある。花色が「うすむらさき」であることも、季節の緑の中で分を弁えていて好ましい。初夏の空の青さを背景とし、桐の花咲ける僅かな空の色を「そこがうすむらさきの空」と詠む繊細な感性が「心に泌みる」のである。

桐の花の、「可遠観而不可褻翫」<sup>注24</sup>ところが、どこか蓮の花の風情に通いあおう。心に残る『太虚集』中の一句である。

櫨の木の花にかまわぬ姿かな (野ざらし紀行)

この句は、三井秋風の人となりを詠んだ芭蕉の挨拶のひとつ。『太虚集』にも端正な人が一人いる。

× × ×

合歓の花昼寝に死者がやってくる (S 45)

この一句、些か不気味で難解。構造は五／七五である。上五と中七の間で大きく切れていて、しかも意味上の関連性は認め難い。不知の心象を一句に仕立てたゆえか、極めて主観が強く抽象的である。

庭に咲く合歓の花を何気なく見ているうちに睡魔に襲われ、暫しまどろむその夢の中にやってくる(出会う)死者とは、想像するに亡き父母であろう。己が姿をその中に見ているとすればシュールな世界であるが、ありえないことではない。夢中の父母は若いが、子供の自分は老いており(夢中の己れを幼き日の己れとは解し難い)、親子の年齢は逆転しながら、子として振る舞う(ベルイマンの「野いちご」を連想させるものを感じる)。両親とも極く／＼自然に老いた我子を子として扱う。夢



〈表三・『太虚集』季題別句数〉

無 季		冬		秋		夏		春		新 年					
1	閑日	4	1 雪	14	1 露	9	1 天の夏	6	1 緑蔭	1	1 蝶	12	1 新年	4	
			2 冬の雲	7	2 道元忌	7	2 紫陽花	5	1 万緑	1	1 梅	12	2 元朝	4	
			3 冬日	5	3 終戦日	4	1 朴の花	5	1 薔薇	1	3 二月	9	3 お降	1	
			4 冬	4	4 蟬螂	4	4 夕焼	4	1 夏草	1	4 落椿	3	4 七日	1	
			5 十一月	3	朝顔	4	蟻	4	1 青葡萄	1	5 春暁	2	5 読初	1	
			霜	3	6 天の川	3	蝸牛	4	1 あやめ草	1	立春	2			
			一葉忌	3	星合	3	麦	4	1 沙羅の花	1	雛	2			
			山茶花	3	鵲	3	8 晩夏	3	1 栗の花	1	実朝忌	2			
			枯木	3	雁	3	梅雨	3	1 夏木立	1	げんげ	2			
		10	冬の日	2	鵜	3	炎天下	3	1 桐	1	菜の花	2			
			大寒	2	11 朝寒	2	夏山	3	1 泰山木	1	春の鳥	2			
			立冬	2	秋夜	2	昼寝	3	1 さくらんぼ	1	12 春の天	1			
			冬めく	2	月光	2	13 夏	2	1 えごの花	1	花曇	1			
			暮早し	2	秋風	2	半夏生	2	1 山法師	1	苗代	1			
			凍天	2	霧	2	虹	2	1 椎の花	1	雪解	1			
			冬晴れ	2	秋の蝶	2	夏の雲	2	1 梅雨明け	1	大試験	1			
			冬の空	2	頬白	2	穀象	2	1 雲の峰	1	卒業	1			
			歌留多	2	鹿	2	百日紅	2			春服	1			
			冬構え	2	虫	2	アカシア	2			蛙	1			
			冬の川	2	葦	2	合歓の花	2			蝌蚪	1			
			冬木立	2	木槿	2	青葉	2			地虫出づ	1			
			柊の花	2	木犀	2	筍	2			兼好忌	1			
		23	凍つ	1	葛の花	2	凌霄花	2			春の草	1			
			寒さ	1	木の実	2	24 猛暑	1			桜	1			
			十二月	1	25 冷ややか	1	夏の夜	1			枳殻の花	1			
			師走	1	秋	1	立夏	1			董草	1			
			冬至	1	新涼	1	片蔭	1			竹の秋	1			
			年ゆく	1	稲妻	1	夏の雨	1							
			小六月	1	流れ星	1	雷	1							
			寒星	1	花野	1	卯の花腐し	1							
			冬月	1	獺祭忌	1	夏野	1							
			初時雨	1	鯛	1	滝	1							
			冬の海	1	秋の猫	1	風鈴	1							
			冬の田	1	蜻蛉	1	氷水	1							
			炬燵	1	邯鄲	1	夏衣	1							
			マスク	1	掠鳥	1	白餅	1							
			懐手	1	蓑虫	1	香水	1							
			スケート	1	菊	1	汗	1							
			一茶忌	1	茱萸	1	幟	1							
			クリスマス	1	葛の蔓	1	夏行	1							
			年の市	1	無花果	1	火蛾	1							
			冬の蝶	1	草の実	1	水鶏	1							
			冬の鵲	1	黄葉	1	羽抜鶏	1							
			密柑	1	桃	1	蠅	1							
			水仙花	1	吾亦紅	1	蜚	1							
			冬朴	1	芒	1	夏雲雀	1							
			帰り花	1	黄落	1	河鹿	1							
			大根	1	敗荷	1	金魚	1							
			佗助	1	新生姜	1	夏の蝶	1							
			一月	1			ほととぎす	1							
1		4	50	99	49	96		67		113	27		66	5	11

とも現とも定かならぬ目覚め直後の模糊とした意識の中で、夢を反芻する時、それは昔の、莊子胡蝶の夢に通い合う。

合歎の花と死者（死）の間に見えざる回路があるか否か、寡聞にして知らないが、眠りが一種の疑似死、目覚めが蘇生であることからすれば、

合歎（ネム）↓寝（ネ）夢（ム）↓死・蘇生

という連想が決して突飛なものではないことが判る。同じ合歎の花ながら「雨に西施が」と美人の顔ばせに準えて詠まれた合歎とは明らかに違う。

合歎の花うたゝねに死者やってくる（「朝」35集・S45）

が、初出の句型、中七以下に不知の斧正の跡を知る。「うたゝね」を「昼寝」と具体化し、「が」と主格化することで句に表情と奥行が生じ、莊子の故事を句の彼方に髪髯とさせ、効果的である。

同様な発想はその後も受け継がれ、

合歎咲いて昼寝に遇ふは死者ばかり（S49～50）

昼寝覚出入りたやすき死者の国（S52～53）

のような句を生むが、平凡である。

合歎の花日ねもす蝶のすさめつつ

虚子

花合歎の下を睡りの覚めず過ぐ

龍太

右の二句も何処かで莊子の夢に繋がっている。

## 六

重複を厭わず改めて記しておきたい。

長田不知、本名壽夫。大正二年十二月十五日、甲府市富竹四

——三七（現在）にて出生。昭和六十三年十二月二十一日、生家にて死去。享年七十五才。俳人として句誌「朝」（S19・12創刊）を主宰、句集『太虚集』。

その文学的略歴を『太虚集』跋及び「朝」一四二集（H1・3）所載の月光庵編による「略歴」を参考にしながら、以下箇条書風に述べておく（なおへ内は月光庵の「略歴」記事引用）。

○二十才頃までは詩に関心をよせていた。

生田花世の「詩と人生」に投稿。文蘭社の「詩壇人国記」に新進詩人として名前が載る。<sup>注25</sup>萩原朔太郎の『詩の原理』に感激、手紙を出し返書を貰う。〈萩原朔太郎ト若干ノ交遊アリテ詩ニ情熱ヲ燃ヤシテイタ〉

○二十一・二才頃か。

某雑誌社より飯田蛇笏の講演筆録を依頼された事が契機となり、境川の山廬に蛇笏を訪問。その折りに「わたしが断言するが、君は将来必ず俳句を作るようになる」と言われたという。<sup>注26</sup>しかし、作家志望ゆえにさしたる感激はなかった模様。

○二十七才（S15）

上京、芝区役所（現、港区役所）勤務。「鶴」同人斎藤砂上と知り合う。同好の士数人で「しのぶずり」という同人誌を出したのが俳句との関わりの第一歩となる。砂上の縁で石田波郷を紹介されたりもしたが、俳句を文学の中の下位と見做していたために親交を敢て結ばず。

○二十八才（S16）

恩師鳴山草平の紹介で当時の新進作家日吉早苗を知る。同人の勧めにより藤嶺学園藤沢中学校国語教師として教鞭をとる（S 23・3迄）。

○三十一才（S 19）

十一月二日、大船、昌運工作所にての翔雲句会出席。久米三汀・永井東門居・山田雨雷等も出席する。その折りの句「無精さの寝煙草覚え朝寒し」

十二月「朝」創刊。この頃、当時NHK勤務の福永武彦と知り合い、氏の北海道移転まで親交を結び、詩のノートを見せて貰ったり、小説の腹案を話されたりして影響を受ける。北海道移転後の福永の部屋に移った（羽衣<sup>註27</sup>荘）。

又、「ホトトギス」に投句などするもこの時期。

○三十三才（S 21）

俳号太虚を不知に変える。

○三十四才（S 22）

十二月、二十五集をもって「朝」休刊。以後、昭和四十年十月の復刊までの間西欧文学への強い関心を示す一方で〈道元ニ傾倒セル〉こともあった。

○五十二才（S 40）

「朝」復刊を契機とし「俳句を自分の仕事として真剣に取り組むようにな」り、「弱少の文学であった俳句に何よりの優しさと安堵を覚えるようになった」と跋中で述べる。

○七十二才（S 60）

十二月『太虚集』上梓。

若き日の不知のもとに集まった若者達は、本文中にその名を記した、河口寛（帰蔵・月光庵）・土岐敦（宇徠）・句誌「平潟」主宰石田昭義（無為）・歌誌「あらたえ」同人河口一紀・作詞家菊地正次（綺羅）等の他に、いずれも物故者となったが、シナリオ作家津瀬宏・俳優菅沼赫・東北大学教授文学博士志村良治らがいたことも「略歴」の最後に加えておきたい。  
（文中敬称略）

注1 『太虚集』跋。

2 後述三参照。

3 注1に同。

4 「朝」124（S 61・3）収、「太虚集の底に」

5 第一次「朝」（No 1～No 25）時代。「朝」創刊は昭和19年12月。

同22年12月の第25集にて休刊。

6 復刊「朝」第26集は昭和40年10月。復刊するが同42年10月、第34集にて再び休刊。

7 昭和45年4月、「朝」第35集にて再度復刊するが、次集第36の発刊まで一年余の時をまつ（同46年7月）。36集以後は隔月刊を続ける。

8 季題排列は『日本大歳時記』（講談社刊・全五冊）のそれに従う。

9 他に、「ひとり」というような認識も含み数える。

10 夏冬の句が多い点に関し、河口帰蔵は『徒然草』第百五十五段を引用しつつ不知を「季節への四通八達がなされている俳人」

と述べる〔朝〕124集収「太虚庵春秋」。示唆に富む卓見である。

11 このことは〈表二〉において、生活・行事といった季題による句作が極めて少ないことから首肯できる。

12 昭和20年7月、応召。即日帰郷……（不知「略歴」月光庵編〈朝〕142集〉

13 「不知俳句と私たち」——先生の俳号について——〔朝〕54集、S 49・7）

14 土岐敦「不知俳句と私たち」——〔朝〕草創の頃——〔朝〕53集、S 49・5）の記録に一部誤りを認めるので、本稿で正しておきたい。以下各句の初出と『太虚集』掲出、その他との異同を参考までに記しておく。

○秋の蝶暖簾へ吹かれ死ぬことも〔朝〕4・S 20・10）

秋の蝶暖簾に吹かれて死ぬことも

〔朝〕40〈草創期作品抄〉・S 47・3）

秋の蝶暖簾に吹かれ死ぬことも〔太虚集〕

○向きて立つ枯木に言葉ある如し。

〔朝〕7・S 21・1、〔太虚集〕

○時雨来やすなはち陰る部屋の菊〔朝〕には不出

○枯枝にひつかかりつゝ冬日落つ〔朝〕15・S 21・12）

枯枝に引つかゝりつゝ冬日落つ〔太虚集〕

○マスクして言葉少なに身を守る

〔朝〕20・S 22・6、〔太虚集〕

マスクして言葉少なに身を守る

〔朝〕40〈草創期作品抄〉S 47・3）

尚、〔朝〕創刊期同人の「ホトトギス」入選句も知りえる限り記し、その作句姿勢の一端を解する一助としたい。

目瞑れば赤いくらやみ日向ぼこ 菊地綺羅

（590号、S 21・2）

咳を杖に伝へて大地うつ 土岐宇徠

（593号、S 21・5）

鬼ごとの子が此處に来て咳こめる 菊地綺羅（同右）

たらちねのいのちしづかに火蛾舞へり 河口帰蔵

（599号、S 21・11）

門火焚く町を貫きわが通る 石田無為

（600号、S 21・12）

追羽子の村晝月の一ひあり 石田無為

（605号、S 22・5）

歩をとどむ毎に春日のちからあり 河口帰蔵

（607号、S 22・7）

15・16・17 注1に同

18 注5・6・7 参照

19 初出〔朝〕7集。後〔朝〕40集中の「草創期作品抄」は下五を

「心通う」と直すが『太虚集』では再び初出型に戻す。何らかの形で斧正の跡を認めうるものは『太虚集』中166句を数える。

こうした姿勢の中に不知が『太虚集』上梓かけた情熱の並々ならぬことを知る。

20 出ればすぐ寒さ住みつくひとりの家（S 48）

ひとりの家いちばん先に冬が来る（同右）

21 集中十三句を数える。齡耳順を前にした頃から懐旧の思いを

句に詠みはじめる。

22 注1に同

23 〈表二〉によれば動・植物の季題合計は95を数え、過半数に近い。具体例は〈表三〉参照。

24 周敦頤「愛蓮説」

25 未見

26 不知自身は蛇笏との縁をあつさりと述懐するが「朝」8集(S21・2)はその巻頭を「俳句研究」第二巻十號(S20・12)に昭和二十年度作品年鑑として発表した蛇笏の五句をもって飾っている。

谷川の梅日々しろく山嵐

梅一樹にひばりもやゝ年を経ぬ

谷梅にとまりて青き山鴉

稚梅の紅こくつぼむ墓畑

一碗のおぼえある墓地冬がすむ

地方の一同人俳誌に対し、年度作品の転載を許すというのは、破格の好意というべきか。

27 不知「跋」の当該箇所は次の通り。

福永武彦氏も、ここで私が巡り遇った一人である。氏は当時NHKに勤めていて夜遅いフランス向け放送を済ませていつも終列車で帰って来た。時折休みの日などに私の部屋を訪ねて来られた。「道を曲って暗い石の段を上って来ると、いつもあなたの部屋だけが明かりが点いていて励まされます。」と言われたのを憶えている。戦後のマチネ・ポエティックの運動で発表された詩のノートを見せて貰ったり、小説の腹案を話

されたりした。トーマス・マンの「魔の山」を推奨され、お陰で暫く私はマンの檣となった。「トニオ・クレーゲル」は今も私の好きな小説の一つである。戦争が激しくなつて氏は北海道に移られたが、リルケの「ミュゾットの手紙」が今は亡い氏の記念に私の手元に残されている。氏の出られた後の奥まつて一層静かなその部屋に私が入った。

付記

本稿をなすにあたり、貴重な資料を提供して下さいました土岐敦氏、御教示に与かりました河口帰蔵氏に深く感謝いたします。

(平5・11・8稿)